

## 個人的見解

1. 大学、大学生の位置づけ
  2. 大学で学ぶべきものⅠ
  3. 大学で学ぶべきものⅡ
    - 3.1 情報リテラシー
    - 3.2 英語力
    - 3.3 システマティックな考え方
- \*ばらばらの pdf ファイルを統合して修正

## 商学部生および学部での学習についての個人的見解

### 1. 大学、大学生の位置づけ

同世代の約半数が短期大学を含む大学に進学する時代の大学の役割はどのようなものだろうか。「第2次世界大戦前の大学生の数は、現在の大学の教員数程度であった」と聞いたことがある。これは正しい情報なのか確かめもせずに伝聞で書いている。しかし、学生諸君の祖父母ないし曾祖父の時代には、「大学生」はかなり少数、したがって、知識階級たるエリートであったことは間違いない。ここで曾祖父に母をつけて「曾祖父母」としていないのは、残念ながらその時代では女子学生はほとんどいなかったはずだからである。

大学の数が増え続ける一方、出生数の減少で若い世代が減っている。さらに学力低下が追い打ちをかけている。この世代の半数が大学生になるとすると、大学では必然的に入学時の学力が下がることになる。この世代に皆さんも含まれている。もっとも学力不足の問題は皆さんの責任というより、教育制度を担ってきた社会の責任に帰すべきである。

諸外国との関係や教育制度の体系上、大学の「高等教育機関」としての位置づけを変更することはできない。しかし、世代の半数が学ぶ大学の実質は、「専門家の養成」ではなく「専門家になりうるための教育訓練機関」である。本当の専門家は大学院あるいは実務に入ってから「さらなる努力」があってはじめてなりうる可能性があるもの。そしてまた、日常的な研究活動あるいは専門家としてのトレーニングを続けていなければ、ある一時点の専門性は時の経過と共に陳腐化され「専門家だった人」に変わる恐れの高いものだと考えるべきであろう。

「大学である専門領域を学んだのだから、それを活かせるポストを就職時に求める気持ち」は理解できる。とくに大学時代に良く学んだ女子学生は、「四大」の専門性を意識として持ちやすくなる。もちろんそれだけの意識を持てるほど勉学に励むことは、大学生の本来の責務を着実に果たしていることの証明である。

しかし、大学を取り巻く環境が前述のようだとすれば、皆さんの努力は、

**専門家になりうるための基礎的な学習を行うこと、そして個々の専門領域**

## の一端に触れ、自分がこれから進んでいく領域についての概要を知ること

である。大学時代の専門家になりうるための「基礎的な学習」は、皆さんがその領域の専門家にもしなくとも、一生涯皆さんの知的活動の原動力になるはずである。

## 2. 大学で学ぶべきもの I

「大学で学ぶべきものは何か」の答えはたくさんある。皆さんはまず自分が本当に学びたい専門科目をあげるだろう。しかし、『大学、大学生の位置づけ』で述べたように、

### 専門家になりうるための基礎的な学習を行うこと、そして個々の専門領域の一端に触れ、自分がこれから進んでいく領域についての概要を知ること

が皆さんに必要であるとすれば、専門科目を学ぶ基礎としての科目も必要である。これについては『大学で学ぶべきもの II』で述べる。ここでは「大学時代に身につけるべき基礎的素養」を取り上げてみよう。

### 自分が成し遂げたい目標を設定し、その目標達成に向けて、適切な手段、手順を考え、目標時間内に十分な目標内容を達成する経験を重ね、実社会でもその経験を活かせるようになること

ここでいう目標のターゲットは何も個人的な学習に限られるだけではない。ゼミ、サークル、仲間との活動、さらに個人的な趣味も含めている。また、クリアーする目標は1年にいくつが適当だと数えられるものではないし、大きなものも小さなものも存在する。

大学時代は人生で一番時間が豊富なことから、その豊富な時間にしかできない大きな目標を設定し、時間をかけてやり遂げて欲しい。この大きな目標が学問上のものでなくても、時間と努力を投入してクリアーしたとすればその経験は間違いなく学生時代の宝となる。就職面説で面接官に「どのような目標」を「いかにクリアーしたか」堂々と説明すればよい。困難な目標を達成した経験はそれが何に対してであれ、マイナスの評価になるべきものではない。

ある科目に対しどのような達成度の学習を行いどのような成績を取るか。たった1つの科目でも小さな経験は可能である。学生時代の大小さまざまな経験を通して、目標管理、時間やプロセスの管理、ひいては1人ではできない目標を仲間と共同で達成することを学んでいくのだ。それによって個人としての活動はもちろん、人と人との関係を築き、円滑に維持していく能力も培われていくのである。

## 3. 大学で学ぶべきもの II

専門科目を学ぶ基礎として要求される科目、たとえば、商学部生としては、簿記会計、経済学、経営学、商学などの知識は当然求められる。このベースの上に学生個々の本当の専門科目が広がっていくのである。ここでは読者を商学部の学生と限定せずに、専修大学の学生全般とし、専門部分は除いた時に、「大学時代に学ぶべきもの」は以下の3つであると考ええる。

### (1) 情報リテラシー

パソコンくらい使えて当たり前の部分。商学部の科目としては「情報基礎Ⅰ」、「情報基礎Ⅱ」、「プログラミング」その他の情報処理関連科目

### (2) 英語力

もちろん外国語科目としての「英語」科目が存在する。ただし、重要なのは今の自分の実力からどのようにステップアップするかである

### (3) システマティックな考え方

数学的思考とシステム思考の両面を考えている。「基礎数理」、「経営数学」

もちろんこの他に、

本や雑誌を読み情報や知識を得られる、すなわち文献を利用できる  
まともな日本語が書ける、すなわちレポートがまとめられる  
人前でまともに話ができる、すなわちゼミなどで必要最低限のプレゼンテーションができる

なども必要である。

以上は、個人的な目標としてクリアすべきものとしても良いし、個人学習、ゼミの学習、大学を通しての全般的な学習の成果として身につけてもよい。もちろんここで表現した「最低限の状態」よりも、より高次の実力を身につけたい項目であることは当然である。

## 3.1 情報リテラシー

### (1) 基本部分（コンピュータリテラシー）

パソコンを利用して電子メールをやり取りしたり、必要な情報をインターネットで調べたりすること。レポート、ゼミのレジュメはもちろんワープロ打ち。必要に応じて表計算機能を利用して、集計表やその結果を示すグラフをレポートやレジュメに挿入できること。ゼミなどプレゼンテーションではPower Pointを用いて発表用資料を作成し、液晶プロジェクタあるいはOHPを利用すること。PCをごく自然なツールとして大学生活を送ることが第1の学習事項である。

ここまでではコンピュータリテラシーではないかとクレームが出そうなので、より本質の部分を次項で述べる。もちろんこの部分が身につかなければ次には進めない。

## (2) 情報リテラシー

自分が生み出す情報の意味を理解し、より創造的な情報を生み出そうと努力しつつ、PCその他の情報機器、インターネットなどのネットワーク、そしてもちろんこれらのハードウェア上にあるソフトウェアを使い込んでいく能力まで必要である。情報リテラシーとは、あくまでも読み書きそろばんとしてのPC利用であるコンピュータリテラシーよりも上位の概念をイメージしている。

なお、携帯電話でのインターネット、メールの利用は放っておいても身につく。若い世代として携帯電話が使いこなせないと困るものの、ここで取り上げるべきではなからう。自然に誰でも携帯でブログを読むかもしれない。PCを日常的に利用し、コミュニケーションのツールとしてSNS (Social Network System) を利用して欲しい。

具体的科目としては「情報基礎Ⅰ」、「情報基礎Ⅱ」が真っ先に上がる。しかし、この2科目をマジメにやっただけではコンピュータリテラシー段階を脱しない。学生生活の日常で学んだことを活かすこと。商学部の学生としては、願わくはもう少し進んで、「プログラミング」まで取りつつ、プログラムとはどのようなものであるかを理解したり、OS (Operating System) やソフトの世界の事情について理解したりも上乗せして欲しい。ただし、このレベルの理解には相当な時間と努力の上乗せが必要となる。MS-Office 以上を目指すにはそれなりの覚悟が必要である。

## 3.2 英語力

すべての会社が日産自動車のように「ある日突然外国資本に会社の指導権が移り、あれよ、あれよといっている間に英語が社内の公用語になる」とは限らない。日産自動車は、業績不振のため、フランスのルノー傘下にはいり、ゴーン社長を迎えた。見事復活して、現状では立派に立ち直っている。しかし、依然としてルノーのグループ企業の位置づけである立場はかわらない。日産では外国人を含めての会議では英語が公用語である。

これから先を見据えたとき、世界の共通言語として共通のコミュニケーション手段としての英語の必要性ははるかに高まると考えられる。

もちろんこれからもすべての日本人に英語が必要なわけではない。しかし、皆さんは同世代で約半分が大学に進学し、その進学した半分の中で中程度の学力を持って商学部に入學したはずである。まじめに勉強した(?) あかつきにビジネスマンになることを想定すると、少なくとも同世代の上位4分の1レベルに近い場所に自分たちが位置していると考えなければならない。日本のこれからの若い世代の上位25%に英語が必要でないかといえれば、個人的にも、また国家のレベルからも「当然必要」が答えであるべきではないか。

商学部の学生は特に英語を嫌う傾向がある。中高の英語教育で英語が嫌いになったという学生もいる。過去の教育に問題がなかったとはいわないものの、「あなた個人として、これからどうするのだ」と問いたい。

これからの長い一生英語からひたすら逃避するのか、それとも必要が生じた時点で腹をくくって勉強を始めるのか、それとも学生時代のうちになんらかの手を打っておくのか。

もちろん「英会話では不自由しません」、「TOEIC900 点台です」、「TOEFL で 250(600) 点以上取りました」、「英検 1 級持っています」などの返事ができる学生はとりあえず除くである。(注)TOEIC、TOEFL とも国際的な英語力判定の試験。後者の括弧内の点数は旧基準。

英語を母国語とする国に生まれればもちろん、そのような国に何年か住めば英語を話すようになるだろう。しかし、若い世代が全員留学するのではない限りそのようなことは望めないのだから、現実を直視しながら今後どうするかを考えなければならない。

この項目、本年度ビジネス英語を担当する身としては、筆が走りすぎたかもしれない。

### 3.3 システマティックな考え方

本当は論理的、システマティックな考え方(system thinking : システム思考)とは別に、数字に強い、数学的なセンス、たとえば「マネジメントサイエンス」を独立な項目として、ここで掲げたかった。しかし、「大学で学ぶべきもの」が3つなのか4つなのかは、数が多すぎると勉強する側のインセンティブに影響するから非常に大切である。このような場合に取り上げる数を「3つ」に限定するのは定番ルールである。数学嫌いが全学的多いことも配慮して、ここではシステマティックな考え方の側面と数字や数学的センスの問題を1つの項目として統合して取り上げる。

前者はものごとの本質を系統的に整理しながら、ある側面からしっかり分析する能力、後者は、数字を使って議論できること、すなわち会計的、経済学的あるいは統計的な数値を分析的に取り扱え、さらには数理経済学的なアプローチやマネジメントサイエンス的なアプローチを違和感なく学習し、利用していけるセンスを意味する。これらを統合して、記述的なもの見方だけでなく、より分析的なもの見方が身につけていることである。

高校時代に数学を見放した学生は英語を見放した学生以上に多いと思われる。文化系の大学受験に不要な数学、いったい学習してもどこで使うかわからない数学を皆さんが既に見放してしまったことは理解できるし同情もできる。しかし、英語が単なる英語圏の言葉ではなく、国際標準語なのと同様、数学も世界共通の言語であって、しかも英語同様、あるいはそれ以上使うのである。また、少なくともこれからビジネスの世界に身を投じる学生にとって、ここでいう「システマティックな考え方」の修得はやはり重要だと思われる。

英語は各種のテキスト、テレビやラジオの英会話講座、CDやカセット教材、英会話学校など学習手段は想像できる。しかし、数学を放棄した学生にはどうしていいかわかりにくい。しかし、「基礎数理ⅠあるいはⅡ」で数学を思い出し、「経営数学」で数学的利用の一端は学べるかもしれない。

平成 20 年度担当は、基礎演習、ゼミナール、情報基礎Ⅰ・Ⅱ、基礎数理Ⅰ、ビジネス英語、経営数学。神田では経営情報Ⅰ・Ⅱを担当。本稿は、2001 年に書いた文章を統合し、加筆修正している。商学部ではカリキュラムの改変を頻繁に行っている。ここでは自らの科目との関連を強調した。しかし、役に立つ専門科目はまだたくさんある。以上